

エラスムスの『校訂版新約聖書』 第二版(1519年)について



神学部教授
木ノ脇悦郎



エラスムス
『校訂版新約聖書』
第二版(1519年)

1999年4月の『時計台』68号にエラスムスの校訂版新約聖書初版(Novum Instrumentum)を紹介してから3年半が経過した。そして、今回その第二版をここに紹介できることは大変喜ばしいことである。

ところで、エラスムスは『校訂版新約聖書』の出版にあたり三種類の序文を付けている。Paraclesis(読者への薦め)、Methodus(方法論)、Apologia(弁証論)の三つである。エラスムスはこの三つの序文を1516年の初版に付しており、その中で聖書の校訂がいかに重要な仕事であるかということ、人間の過ちによって曲げられた聖書本文の改定と原文に添った、より正確な翻訳が必要不可欠なものであり、それは聖書の権威を守る為に捧げられるべき人間的な努力であることを明



エラスムス
『校訂版新約聖書』
第二版(手前)と
初版(1516年)

らかに示している。それ故、彼自身も過ちを犯しうる人間であることを厳しく認識しているのであるから、その校訂版が完全なものであるとは少しも考えていなかったし、当時の優れた人文学者達に対して内容的に問題のある箇所を指摘して欲しいことや、より良い古い写本を持っているならそれを貸して欲しいとの依頼を書簡にしたためているのである。

事実、彼は出版の途中でも何度も校訂を施し、1516年に初版が陽の目を見るとすぐに第二版の出版を準備し始めたのである。初版は印刷された世界最初のギリシャ語原典であり、教会で公的に用いられていた翻訳(Vulgata訳)と違うエラスムス自身の私訳ということも



エラスムス
『校訂版新約聖書』
第二版
タイトルページ

あり、当時の学者や聖職者の多くからは好意的に迎えられたのであるが、反対に厳しい批判も多く出されるようになった。エラスムスの『書簡集』を開いてみると、その批判の多くはルーヴアン大学を中心とする保守的な神学者のものが多いし、時間的にはマルティン・ルターの「95ヶ条の提題」が公にされた後のものが多いことに気付かされるのである。そのような歴史的状況と批判の内容から考察してみると、その多くはウルガータ訳と違う聖書の出版そのものへの批判であり、その内容に対する真摯な学問的批判とは言い難いといえよう。しかし、エラスムスの校訂作業の意図はその序文にも明らかにされているように聖書を正しく読むためのものであったのであり、保守的な批判者たちは彼の意図そのものを理解せず、その行為自体を問題に

序文
「Ratio seu
Compendium Verae
Theologiae」



していたということができる。

1519年の第二版では表題も初版で使ったNovum Instrumentumから従来用いられていたNovum Testamentumを頭を持ってきて、初版と同じように様々な写本や古代教父たちの注解をも参照することによって校訂されていることをそれぞれの名前を列挙して表記している。初版の表題と違うところは頭のNovum Testamentumだけに止まらない。エラスムスはその最後に「よく吟味されることもなしに否定するのは正しいことではない」と書き加え、当時の無責任な表面的批判に対してこの表題でも応えようとしているのである。しかし、このような保守的神学者や聖職者の批判はカトリック教会の公的なものではなかった。なぜならば、初版を教皇レオX世に献呈した後、レオX世はエラスムスを高く評価し、第二版の校訂をしている最中にも教皇書簡を送り（エラスムス書簡番号 864、1518・9・10）、その仕事の重要性和内容の卓越性を称えた上で、これからもその仕事のために精を出すように薦め、校訂作業がすべての信仰深いキリスト者から求められていると断言しているのである。

エラスムスは、聖書の校訂作業だけでなく、いかに聖書を読んでいくかといういわば神学的な関心をも保持しつづけていたのであり、それまでのカトリック教会で主流となっていたスコラ学に対して批判的に関わ



「ローマ書」本文
タイトルページ

り（『痴愚神礼賛』等で明らかに批判しているように）、徹底的に聖書を中心とした信仰、神学を確立しようと考えていたのである。その現れが、先に揚げた三つの序文の扱い方にも見られる。つまり、序文のうちParaclesisとApologiaはそのままの状態と初版と大差ないものであるが、二番目に揚げられているMethodusは第二版から大幅に拡大整備され、表題も単にMethodusではなく、Ratio seu Compendium Verae Theologiaeと代えられているのである。すなわち、「真神学のための方法あるいは近道」というように彼の校訂作業の意図を明らかにし、神学のありようをも提示する為にその分量も初版でのMethodusが10ページ弱であったのに対し、第二版では49ページにも及んでおり、約5倍の分量にまで拡大されたのである。このように、エラスムスは聖書の校訂作業と同時進行で神学的方法論を明らかにしていくのであるが、この文書は1519年第二版の出版に先立ち、ルーヴァンのMartens書店から1518年11月に別途出版されたものが最初のものである。また、校訂本文についても本学図書館が入手した版と違う上質羊皮紙版が三部出版されているが、この版はタイトル・ページも一般に出版されたものとは異なっている。



「注釈書」冒頭
タイトルページ

上にあげた神学方法論としての序文は、第三版からは序文として取り上げられず、別途独立した文書として出版されるようになった。従って、その校訂版はもとより宗教改革期の神学的方法論を提示した本書の序文は歴史的にも重要なものであり、その後宗教改革史の中でエラスムスがとっていくことになる基本的な姿勢をも示す興味ある文書ということができる。

様々な改革が取りざたされ、対立が激化していく世界の情勢の中で、一方では対話の重要性が叫ばれる。何が対話を阻害しているのか、何によって対話が成り立つのか。これは21世紀に生きるための不可欠な知恵であろうかと思われる。16世紀の混乱期の中で、真摯な対話を求め続け、キリスト教と社会の変革をも根底から望んでいた人間の努力の結晶をこの『校訂版新約聖書』第二版に見ることができる。